

## 日本新薬(株)所蔵神農像厨子扉絵に 描かれている人物について

周防 一平, 小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

**【諸言】**日本新薬(株)所蔵の神農像については日本医史学会関西支部総会(2013.11.10)および日本医史学会例会(2013.11.23)で現物が展示され、小曾戸が一部私見を述べた。この際、扉絵に描かれた人物について判明していなかったが、新たに調査を進めたところ新知見があったので報告する。

**【神農像および厨子概要】**この神農像は同社OB小泉淳二氏より京都市東山区古川町の小泉家の仏壇に寄贈者の祖父小泉俊太郎氏(1855~1945)の代から祀られていたものを、平成10年に同社に寄贈されたものである。本神農像はその特徴として厨子に納められているという点が挙げられる。厨子とは仏像や舍利、経巻等を納める仏具であり、神農像が厨子に納められているというのは他に類のないケースである。厨子の外側は黒色、表側は観音開きの扉になっており、厨子自体の背面に文が刻まれている。内側は金色、通常の台座の上にさらに龍、岩を象った台座があり、その上に神農像が設置されている。その上部に菊紋を中心に葵紋を左右に配置した意匠が見られる。また、扉絵の向かって左側に僧形の人物が、右側に狩衣姿の武士らしき人物が描かれている。

**【厨子の制作年代】**厨子背面の文には「厨子中薬祖神農者子先考平素所敬慎之尊像也子多病而性質怠惰嘗恐童幼婢妾所点汚之罪因祇園境中奉納薬師堂祈衆人之起死回生子孫永每朔日供御膳無怠慢者也 宝曆八年戊寅五月 洛陽草医柴田玄敬敬書」とある。また、神農像の背面に「享保十四 酉十一月吉日 巖白蛇 新再興也」と書かれている。このことから、少なくとも享保14年(1729)には制作されていたと考えられる。また、天皇家の菊紋、徳川家の葵紋がともに飾られていることから、江戸幕府成立(1603年)以降に制作されたものであると考えられる。よって、1603~1729年の間に制作された可能性が高い。

**【扉絵の人物】**上記菊紋、葵紋より、扉絵に描かれている人物は向かって左側は天皇もしくはは上皇、右側は江戸幕府將軍ではないかと考えられる。上記制作年代にあたる天皇は、後陽成天皇(1571~1617)、後水尾天皇(1596~1680)、明正天皇(1624~1696)、後光明天皇(1633~1654)、後西天皇(1638~1685)、霊元天皇(1654~1732)、東山天皇(1675~1710)、中御門天皇(1702~1737)の8名である。この中で出家した男性は、後水尾天皇、霊元天皇の2名である。一方、將軍は、初代徳川家康(1543~1616)、2代徳川秀忠(1579~1632)、3代徳川家光(1604~1651)、4代徳川家綱(1641~1680)、5代徳川綱吉(1646~1709)、6代徳川家宣(1662~1712)、7代徳川家継(1709~1716)、8代徳川吉宗(1684~1751)の8名である。そこでさらに人物を限定するために、中央に菊紋その左右に葵紋という構図について調査したところ、京都、南禅寺境外塔頭である光雲寺にある東福門院念持仏に同様の意匠があることがわかった。光雲寺は東福門院和子(かずこ、まさこ 1607~1678)の尽力により再興され、東福門院の菩提寺でもある。東福門院は徳川秀忠の五女で、後水尾天皇の中宮であった人物である。これより、厨子の扉絵に描かれた人物は、僧形の人物が後水尾天皇、狩衣姿の武士が徳川秀忠であろうと推察される。

**【結語】**何故神農像がこの厨子に納められることになったかは明らかではないが、この厨子の扉絵に描かれた人物が後水尾天皇と徳川秀忠であるとするならば、もともとこの厨子に納められていたのは東福門院の像もしくは東福門院ゆかりの品であったのではないかと考えられる。